

「唐丹希望基金」EEC 通信 124 号 2021-7
ー唐丹小中学生に届ける鎮魂と平和の思いー

復興学習交流会 IN 南城中

(2021 年 7 月 7 日：花巻市立南城中学校)
唐丹中学校 八木 稔和



7 月 7 日、全校生徒 16 名は花巻市立南城中学校を訪問し、復興学習交流会を行いました。交流会は「本校 3 年生の防災学習発表会」「南城中生徒の南中ソーラン発表」「震災講話」の 3 つの内容で、格技場と体育館を会場に行いました。まず初めに、3 年生がこれまで取り組んできた防災学習の成果を 3 つのグループに分かれて南城中の生徒に発表しました。鈴木春花さんと、武藤詩織さんのグループは「津波の危険性を知ろう」をテーマに過去の災害のデータをもとに津波の危険性を理解しておくことの大切さを訴えました。一関航帆さん、上野真翔さん、宗 愛依さん、松木春陽さんのグループは「津波の怖さ」をテーマにし、津波の速さ、高さなどの特徴や到達するまでの時間についてクイズ形式を用いて説明し、津波の恐ろしさを訴えました。村上颯人さん、大坂 凜さんのグループは「活用術を使いこなし災害に備えよう」をテーマに、災害時に役立つ身近にあるものの活用術について発表しました。2 本の棒と着ている服を活用してけが人を運ぶ簡易タンカや新聞紙を活用した簡易スリッパなどを実際に作成しながら発表し、災害時に備えて様々な活用術を身に付けておくことの大切さを訴えました。どのグループも相手に伝えるための工夫を凝らし、自分たちの学びの成果を堂々と発表する姿は大変立派でした。次に、体育館に移動して、南城中学校 2、3 年生による南城中ソーランが披露されました。5 台の大太鼓とたくさんの大漁旗を使った迫力あるソーランに唐丹中の生徒たちは圧倒されました。勢いがあり、全力で演技する南城中生の姿に、これからの自分たちが目指す唐中ソーラだったのですごいと思いました。唐丹のソーランも南城中ソーラン以上にキレのあるカッコいいソーランにして披露したいなと思いました」(2 年 青山準佑さん)「一人一人が一生懸命踊っているのが伝わりました。太鼓は力強く、後ろの人たちは掛け声などもそろって全力でやっているのがわかりました。迫力や盛り上げ方、一生懸命さを唐中ソーランで生かしていきたいです」(1 年 中居林 杏奈さん)

藤館 茂先生の震災講話



「震災の時私が勤めていた唐丹中学校の生徒は、その半分以上が津波で家が流されたりして本当に大変な思いをしました。でも、それを乗り越えられたのは、みなさんをはじめ本当にたくさんの方々のお力添えがあったおかげです。本当にありがとうございました。」東日本大震災当時、唐丹中学校の校長先生だった藤館 茂先生は、こう語り始めました。卒業式前日だった2011年3月11日の学校の様子、地震が発生し校長室の壁が壊れ始め校舎が壊れるかもしれないと思えばすぐに校庭に避難させたこと、国道まで避難させようとしたところ地域のお年寄りが学校に避難し始め、3年生にお年寄りの介助を頼んで避難させたこと、漁協の方が来て唐丹湾の底が見えていると教えてくれたこと、3日間工場の仮設小屋で過ごし帰宅できなかった生徒もいたこと、寒くても腹が減ってもだれ一人弱音を吐かなかったこと、地域の方が避難してくると寒空の中、気を使って外で我慢して過ごしていた生徒のこと、食事にも満足に食べられていないのに不平不満を漏らす生徒がいなかったこと、そんな生徒たちに腹いっぱい食べさせてやりたかったという思い、卒業式の時に生徒の制服を準備してやれなかったという思いがずっと心に残っていたこと、体育館でパネルを仕切って授業を行ったこと、コッペパンと牛乳だけの給食が本当にありがたかったこと、大阪府警の方々も一緒に参加して運動会を行ったこと、アメリカからの支援物資が校庭に届いた時のこと、支援物資を整然と並び順番を待つ日本人の姿にアメリカ人が驚いていたこと、マイクも握らずに話す藤館先生に体育館にいるすべての人が引き込まれていました。唐丹中の生徒たちは、当時3歳から5歳で、震災の記憶がない生徒もいるはずですが、自分たちが暮らす学校や唐丹の10年前の話聞いて、改めて震災の恐ろしさや家族や地域の方々が乗り越えてきた悲しさや苦しみ、防災の取組の大切さ、命の尊さ、たくさんの支えがあっての今の自分たちの存在など、多くのことを学んだはずですが。藤館先生は「大切な人を守るため（幸せにするため）に勉強してください」と結び、講話を閉じました。藤館先生のたくさんの思いがこめられたあつという間の40分間でした。

震災講話の感想

◆震災講話の感想 自分は唐丹に住んでいたのに、今まで知らないことがたくさんあった。大変な災害の時に、自分はきっと暖かい部屋を進んで出られるような優しい行動はできないと思う。そんなことのできる心の強い人になりたいと思った。そして、今日聞いた話は、忘れてはいけない、ずっと伝えていくべきものだと思った。忘れないようにしたい。(3年 一関 航帆)

◆藤館先生の話聞いて、自分は津波のことをまだ知らないことが多いと気づきました。津波が起きた時の特徴だったり、津波の後にはどのように行動すればよいのかがよ



くわかりました。これからは自分で も津波についてわからないことは調べたり何が必要か考えたりして、知らない人にもどんどん伝えていきたいと思いました。(3年 村上 颯人)

◆私は初めて津波発生時の唐丹中学校の状況を知った。自分は年少だったためその時は何が起きているのか全く記憶になくあまり怖いとも思っていなかったような気がする。唐丹の話を変えて聞いた時、本当に怖いと思った。話を聞いたただけなのにこんなに怖くなるということは実際に体験して覚えている人はもっと怖いだろうと思った。津波は 自然災害で誰も立ち向かっていくことはできないから、後の世代の人 にも怖さや「津波てんでんこ」について知ってもらう必要があると思う。そして、たくさんの人たちの支援によってここまで復興し幸せに暮らすことができている今があると伝えなければいけない。1日1食の中学生がいたことも知り、今自分が当たり前に行っていることは本当に幸せなことだと分かった。(3年 鈴木 春花)

◆私は「旧校舎はひどかった。危なかった。」この程度しか知りませんでした。体育館でのパーティーションで区切っただけの仮教室。大阪の吉本の人たちが作ってくれた約300人分のカレー。台湾から送ってもらったコッペパンと牛乳だけの給食。いま私たちがしている生活からは想像できない暮らしです。「今の平和な日々は当たり前ではない」私たちの 先輩方や支援をしてくれたアメリカの人、カレーを作ってくれた吉本の人、泊めてくれたNTT事務所の人、コッペパンと牛乳の給食を送ってくれた台湾の人。私たちが今幸せに暮らせているのは、支援をしてくれた方々のおかげです。忘れてはいけない支援者への感謝。忘れてはいけない幸せな日々への感謝。忘れてはいけない3.11。私たちは無力ですが、今日聞いたことを伝え続けていきます。(3年 大坂 凜)

◆私は震災当時、唐丹ではなく津波の来ない場所にいました。だから実際どのように避難したかや津波がどのようなものだったか知りませんでした。ですが、今日の講話を聞いて津波の恐ろしさが改めてわかりました。もし、また大きな 地震が来たらこのことを思い出し行動したいと思いました。また、当時の唐丹中学校の先輩方の行動を聞いて私たちも見習い、どんなときでも自分だけじゃなくほかの人まで考えられるようになりたいと思いました。(3年 松木 春陽)

◆今の自分たちが安心して暮らせているのは、地域の方々や自分たちの先輩、家族全員が協力して頑張ってくれたからということを変えて感じる事ができた。私は震災当時、まだ幼くその時の状況など全く理解することができなかったが、今になってその恐ろしさを感じる事ができた。震災の話をするのはつらい思い出をまた思い出すことになるが、自分たちが語り継いでいき、防災について協力することの大切さを伝えていくことが、いま私たちが取り組めることだと思った。(3年 武藤 詩織)



◆震災当時、地域の人たちがどれだけつらい思いをしていたかが分かった。そして、地域の人思いやりや、食料は全員分そろそろまで誰もが我慢していたり、支援物資を盗む人はいないから鍵はかけなかったことなど、調べるだけではわからない貴重な話だった。僕ももし災害にあったら思いやりの心を忘れずに行動したいと思った。(3年 上野 真翔)

◆震災当時の唐丹中学校の様子は今まで知らなかったの藤館先生の話聞いて驚いた。アメリカの軍人さんとの受け答えも唐丹の人々を信じていることがわかり、信頼関係が強かったのだなと思った。私は当時5歳で細かいところまで覚えていないので、改めて津波の怖さをなめてはいけないと思った。地震はいつ起きるのかわからないし、津波もどれくらいの高さ、大きさなのかわからないので、いつ来ても冷静に対処できるように備えていきたいと思った。(3年 宗 愛依)

◆東日本大震災の時の唐丹について知ることができたし、ものすごい津波がきたことを改めて知りました。この話を聞いて、津波の恐ろしさを感じましたし、その恐ろしさを他の人たちにも伝えていきたいと思いました。もし、津波がきたら自分の命は自分で守り、他の人も助けられれば良いなと思いました。(2年 青山 準佑)

◆今日、僕は初めて震災当時の唐丹中生の話聞くことができました。震災が起きた時は卒業式の前日で不安な気持ちや怖いという気持ちがとても強かったと思います。それでも当時の中学生はその困難を乗り越えることはできたのはとてもすごいと思います。それに、自分たちから行動して、協力しながら生活していたからこそ不安にも勝てたのだと思います。僕も、いつ起きるかわからない自然災害に備えてその場その時にあった行動をとれるようにしたいと思います。

(2年 岩澤 優真)

◆今日の講話では、地震直後の唐丹中学校の様子を知ることができました。津波がきた後の唐丹全体の様子はある程度知っていましたが、直後については全く知らなかったの知ることができて良かったと思います。今日の講話を今後の防災学習に生かしたいと思います。(2年 川原 悠翔)

◆私は当時鶴住居に住んでいました。正直震災当時のことは一つも記憶がありません。ですが、どれほど津波が恐ろしいものか、改めて知ることができました。当時の中学生がどういう行動をとったのか、どのような生活をしていたのかということも知れました。今回の学習を生かして、自分や地域の人々の命を守ることも考えながらこれから授業を受けていきたいと思いました。

(2年 高橋 愛里)

◆私は今まで唐丹や他の地区の震災の話は聞いてきましたが、唐丹中学校の震災の話聞いたのは初めてでした。藤館先生が「卒業式はジャージで迎えた」とおっしゃっていて、私は当時の被害がそんなにひどかったのだなと思いました。私は、藤館先生の話聞いて今の日常が当たり前ではないと思いました。そして、私たちは東日本大震災で起きた出来事を後世に伝えていきたいと思いました。(2年 留畑 史花)

◆今回、藤館先生に津波の時のエピソードを話していただいて、この制服を着ることができるのも、学校に通えるのも、食事をとれるのも当たり前ではなかったことがわかりました。私もこのようなことを当たり前とは思わず、日々の生活に感謝の気持ちをもって過ごしていきたいと思います。

(1年 千葉 香朋)

◆当時、私は2歳。津波でみんなが大変な中、私は寝ていました。兄や多分中3だったところはみんな必死で自分や地域の人々を一人でも多く助けようという気持ちで頑張っていたことがよくわかりました。津波はいつ唐丹や海沿いに住む人々を襲ってくるかわかりません。その時は、藤館先生が教えてくれた自分だけではなく支えてくださった地域の方々と共に協力し、いろいろなことを乗り越えたいと思いました。(1年 中居林 杏奈)

◆地震、津波の恐ろしさを改めて知りました。私はその時、まだ小さくて記憶がありませんでしたが、画像を見て波が町を飲み込んでしまったということが分かっただけでとても怖くなりました。けれど、当時の唐丹中学校の生徒たちは、自分のことだけでなく、地域の人々の命まで守っているすごい方たちだと思いました。私も先輩たちのように、地域のこと守れる人になりたいと思いました。(1年 香川 彩夏)